

宮代町

さかさい

# 逆井遺跡

現地説明会資料

平成7年2月25日

午後1:30～

## はじめに

逆井遺跡は、下野田・逆井地区ほ場整備事業に伴う事前の発掘調査として、平成6年11月から発掘調査を進めてまいりました。

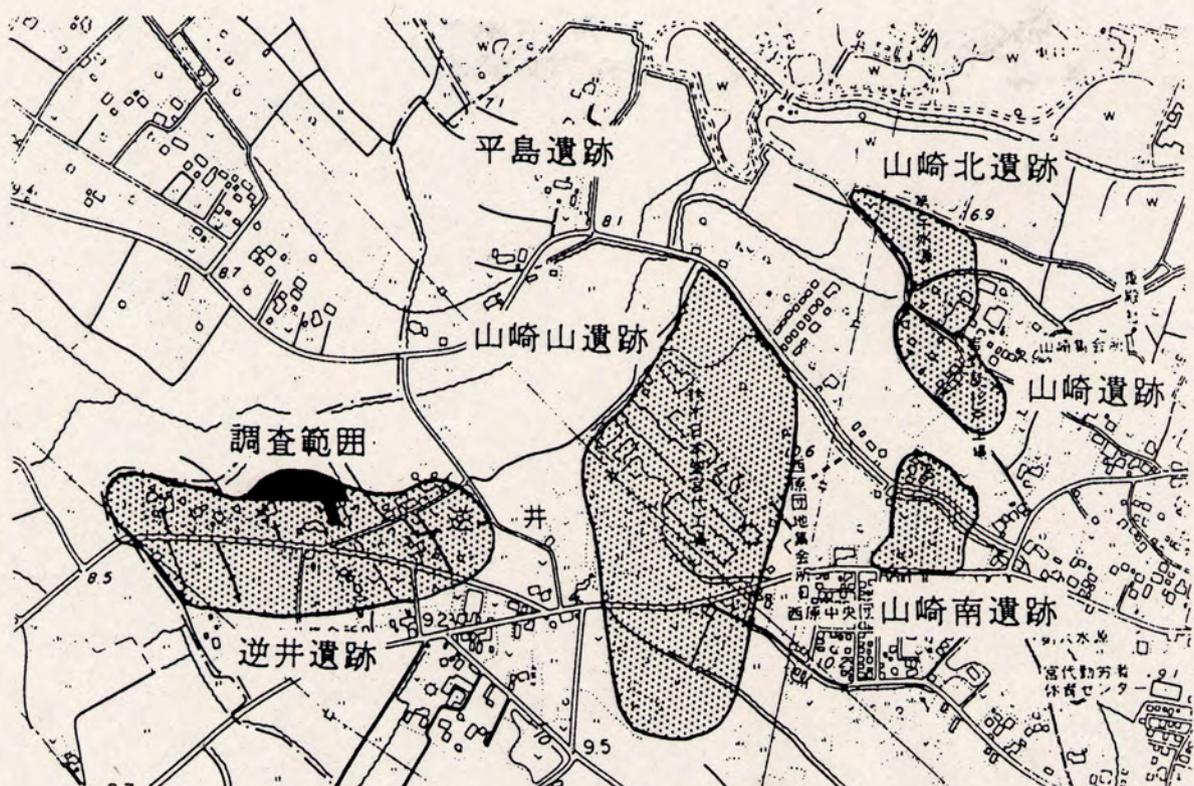
調査によって、縄文時代の建物跡や炉穴、食べ物を貯蔵した穴・土器を廃棄した穴などの土坑と、江戸時代以降の根切り溝が発掘されました。

これらの成果を、多くの皆様にご覧いただくと共に、埋蔵文化財に対する関心やご理解を頂くことが出来ればと思います。

## 立地と環境

逆井遺跡は、大宮台地東北部にある慈恩寺支台の縁辺部に位置する一支台にあります。遺跡は、標高約8mを測り、眼下に逆井沼（現在は水田）を望む高台にあります。

付近には、県選定重要遺跡の山崎遺跡や鍛冶工房跡が見つかった山崎山遺跡、縄文時代早期の集落のあった前原遺跡などがあります。



逆井遺跡と周辺の遺跡

## 逆井地区の縄文時代

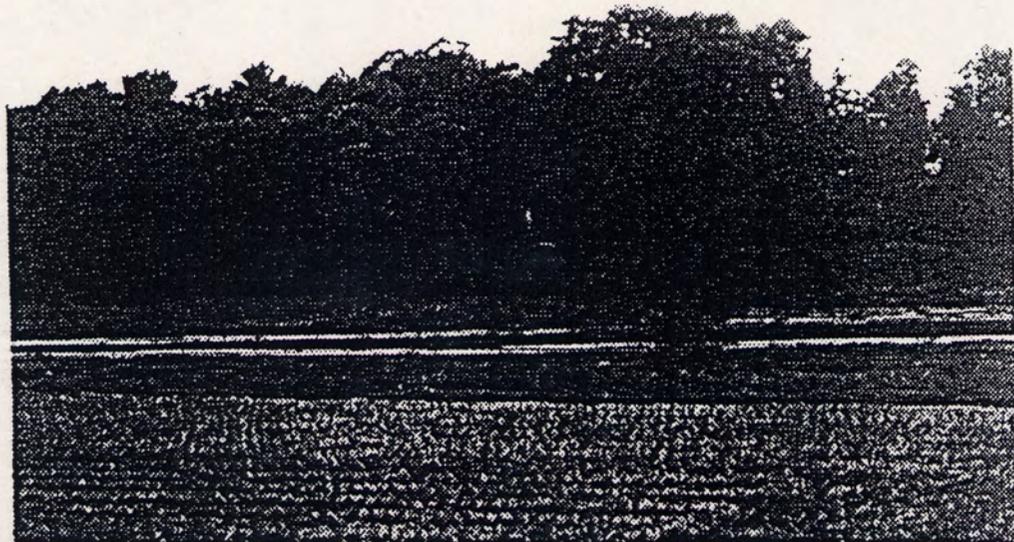
縄文時代、逆井遺跡のある台地と旧逆井沼（現在の水田）との比高差は、現状よりもかなりあり、水位も低くかったと推定されます。そのため、現在、土坑内より水が湧いていますが、当時は、貯蔵穴などとして十分機能していました。

逆井遺跡の北、旧逆井沼を挟んだ台地上の小字平島にも、縄文時代早期（約8000年前）から後期（約3500年前）にかけての遺跡があります。

## 逆井地区の江戸時代

江戸時代中期、先ず、台地上の新田（畑）開発が行われました。その後、逆井沼を開発するため、逆井新田落を掘り、悪水を笠原沼へ流し、新田（水田）を開発しました。新編武蔵国風土記稿によると、享保14年（1729）逆井新田の検地が行われました。

今回、検出された溝の1つは、台地上の新田（畑）開発に伴う溝であると推定されます。



遠方から望む逆井遺跡

## 検出された遺構

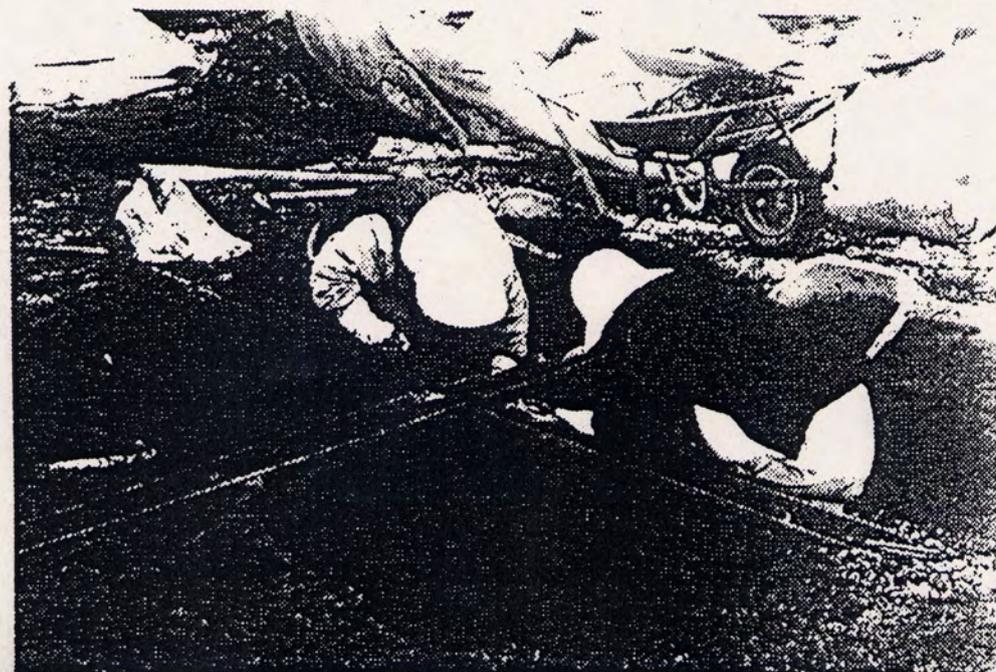
これまでに検出された遺構には、住居跡4軒、土坑16基、炉穴5基、溝5条などがあります。

**住居跡** 縄文時代後期（約3500年前）と推定されるものが3軒、縄文時代早期（約7000年前）か後期（約3500年前）のいずれかと推定されるものが1軒です。いずれも炉がないため、なお検討の余地があります。

**土坑** 土器を廃棄した穴や食物を貯蔵した穴だと推定されます。調査区中央に小型で浅い土坑が集中し、それを囲うように大型で深い土坑が、配置されています。いずれも縄文時代後期（約3500年前）と推定されます。なお、土坑1の覆土からは、多量の土器が出土しましたが、その他の土坑からは、あまり出土していません。

**炉穴** 調査区北側、台地の縁辺部に沿って検出されました。いずれも小型で最大径30～40cm、多量の焼土を伴います。出土遺物などから、縄文時代早期（約7000年前）と推定されます。

**溝** いずれも根切り溝だと推定され、最近（明治時代～昭和時代）の遺物が出土していますが、溝2は、江戸時代中期の新田（畑）開発時に溯（さかのぼ）ると推定されます。



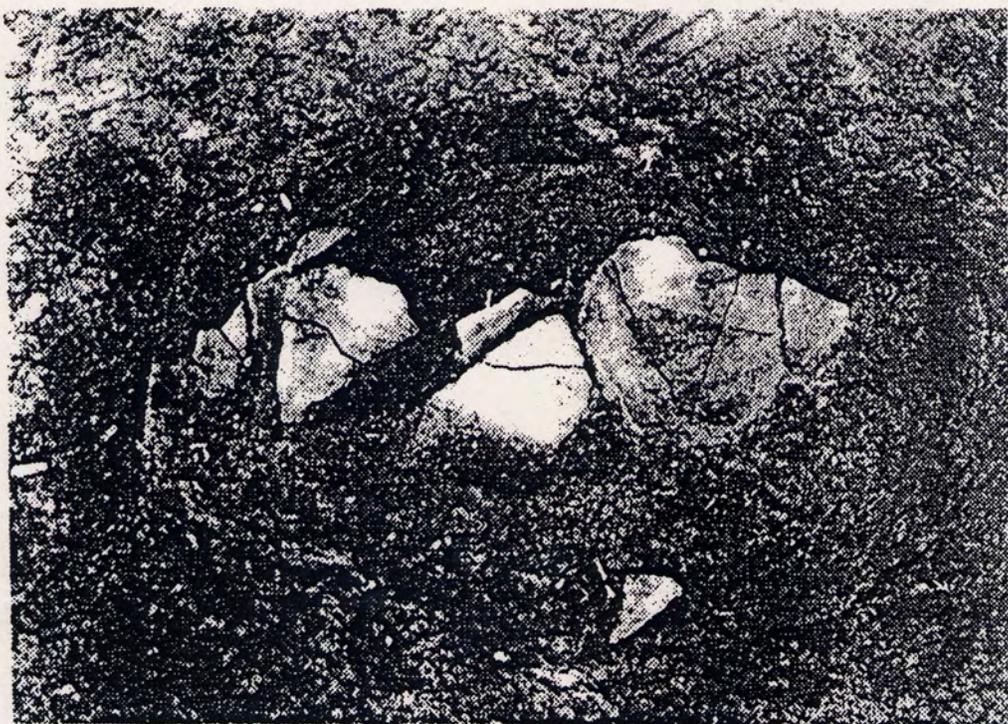
土坑（貯蔵の穴など）の検出作業

## 出土した遺物

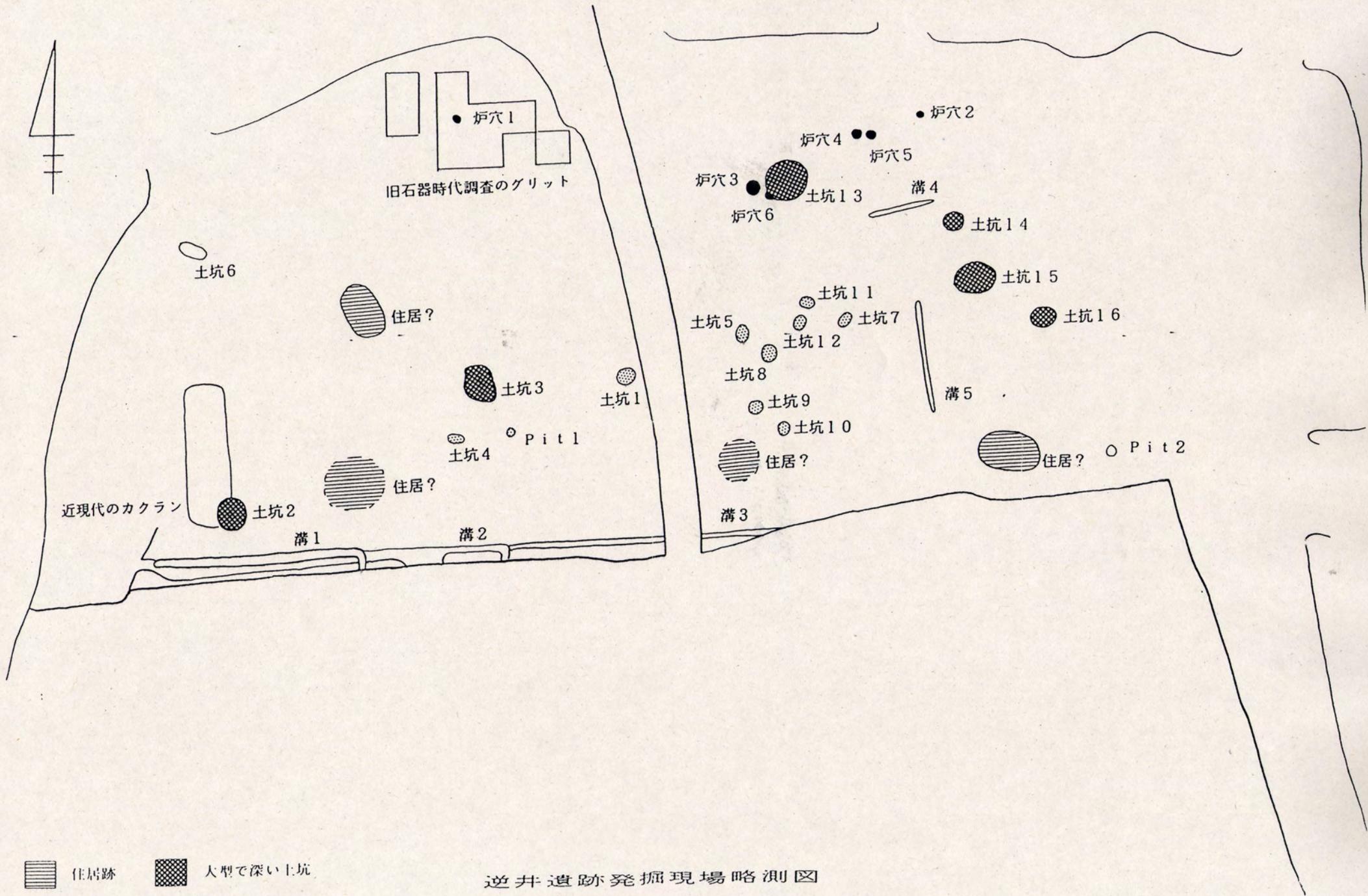
調査区内の遺構や遺物包含層から、縄文時代の土器や石器が出土しました。なお、詳細な検討は、整理作業で行う予定です。

土器 縄文時代早期（約7000年前）から縄文時代後期（約3500年前）にかけての甕（かめ）の破片が、多数出土しました。特に、住居跡内や土坑1では、顕著です。

石器 縄文時代の皮をなめす道具である搔器（スクレイパー）や木の実や穀類をひく石皿と磨石、獲物を捕らえるための矢の先端につけた鏃（やじり）、石器を作る途中破棄された剥片などが、出土しています。石器の中には、黒曜石などの遠隔地で産出される石製のものもあり、当時の物資の流通も、広範囲に行われたことが伺われます。



住居？から出土した土器



- |   |     |   |         |
|---|-----|---|---------|
|  | 住居跡 |  | 大型で深い土坑 |
|  | 炉穴  |  | 小型で浅い土坑 |

逆井遺跡発掘現場略測図